



ICT 海外ボランティア会会報

No. 65

2016年6月24日(金)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : info@ictov.jp

目次

◆ 巻頭言

パネル討論「電電・NTTの海外技術協力」に寄せた提言

東京大学名誉教授 吉田 眞氏

◆ 特別寄稿

既存機種の進歩改良、タヌキの泥船からウサギの木船へ

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

◆ 海外グラフィティ

イパネマの娘

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智氏

◆ 「グルムさんのサポート 国際協力・視覚障害者支援活動」

NPO 法人 SV 経験を生かす会

理事 松田信治氏 理事 山内茂夫氏

◆ 冊子「電電および NTT 民営化直後の海外技術協力活動」へのご評言

事務局

◆ 第 24 回 海外情報懇談会 開催のお知らせ

事務局

巻頭言

パネル討論「電電・NTTの海外技術協力」に寄せた提言

東京大学名誉教授 吉田 眞

(本巻頭言は、去る4月13日に開催された第22回海外情報談話会のパネル討論に対していただいた提言です。事務局)

本日の海外技術協力活動についてのご講演、関係者の方々のお話は、先人の想いと功績を知り将来を考える機会となりました。大変ありがとうございました。

小生自身も国際活動に永年関わってきました。最初の経験は正に JICA での外国人技術者研修講師でした。その後は技術協力ではありませんが、標準化活動で CCITT(現在の ITU-T)での網信頼性スペシャルラポータ、その後、ネットワーク運用・管理の共通枠組み・実装化で国際コンソーシアム (TMForum)等での NTT 代表としての活動、さらに、後者の会長等の立場でデジタルビジネスの最先端で国際協調活動を体験しました。

その後、大学に異動し「工学教育の改革」を担当しましたが、社会の急激な変化とグローバル化での高等教育と教育への ICT 適用の推進において、上述の国際活動体験・人的繋がりが貴重な財産となり、さらにグローバル教育での活動へと結びつき総合的な活動に拡大できています。

前世紀末から、世界レベルの大きな問題が認識されるようになっていきます。

- ・”経済「成長」”は、限界のある地球では原理的にありえない — 途上国が全て急成長(拡大)したら地球は破滅
- ・先進国、特に日本では人口(労働力と消費)が急激に減っていく — 経済も物理環境的にも規模は急速に縮小
- ・目先の利益追求ではなく、100年レベルの持続可能性の実現が評価・判断基準となる

高度成長時代には、途上国は経済成長していずれ先進国になると信じられていましたが、今では全く見当違いの神話です。とっくの昔に高度成長期とは全く前提が変わったにも関わらず、日本では只管「経済成長」を掲げ「旧来の考え方と方法論」に固執して施策を打っています。固定観念を脱し、過去の栄光と自己の目先の利益とを捨てて、今後の不確実性に如何に対応するかの視点が重要になります。

この点から、資源は無くても知恵を出せる日本は、グローバル社会(諸国)から、損得抜きに信頼され、日本があつて良かったと強く支持される立場になることが、今後の不確実な世界での存在意義であり、その努力を継続することが大切です。

このために、カネとモノの投入だけで相手国に何も残らない某国型の経済援助ではな

く、相手国の自立能力・技術を育み、人材が育ち、持続的に発展しライフサイクルを完結（経済「成長」ではない！）できるようにする援助が重要です。これによって、その国だけでなく世界の発展の力になることができます。

本日のお話を振り返って見て、また配布された技術協力活動の資料内容を見て、これが正にNTTの国際技術協力活動の精神だったと感じました。これをNTTグループで再度思い起こして、グローバル社会での途上国の持続的な発展を支援する活動を強化していただきたいと思います。

昨今、教育では「教える」から「”学び”を支援する」、さらに「”学び方を学ぶ”を支援する」という流れになっています。技術協力活動においても「一緒に現場で学びを支援する、教えることで自分も学ぶ」日本型の支援が大きな意味を持つと信じています。

NTT時代に標準化活動について役員クラスの上司の言「NTTがやらずに誰がやる」を思い出します。若い世代に期待するとともに、我々、小生もできることに尽力していきたいと思います。

特別寄稿

既存機種を進歩改良、タヌキの泥船からウサギの木船へ

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝

【真藤 恒氏語録】

開発というのは、一つはいま持っている機種、いま作りつつある機種を進歩改良である。さらに競争力のある、さらに使いやすい、いわゆる総合的な競争力のある方向へ、いまやっている機種を改良していくという開発である。

いまやっている機種は完璧だなどと思ったら大間違いである。考えようによっては、いまの機種は穴だらけのタヌキの泥舟かもしれない。そういうものを、泥舟からウサギの木舟に変えるという意味の進歩改良である。

それをやるのに、工事ごとの進歩改良ではなく、それぞれの工事の技術の中に含まれている、ノウハウのシステムチックな分析、パターン・モジュールというものを確立することだ。そしてその上に、工事ごとのスペシャル・リクワイヤメントを入れながら、生産を進められるようにするには、どうすればいいのかというような設計の改良進歩と、それから既存の機種の設計の仕方のシステムの改良進歩である。

これができないと、設計の人間を機械の代わりに使うという、とんでもないことが起こり、それがなかなか直らない。

【石井 孝氏のひと言】

真藤さんの進歩改良は極めて地道なもので、決して奇を衒ったり、人々をアッと言わせ

るような新機種を狙うものではない。既にあるものに着実に改良を加え、より競争力のあるものに進化させることに眼目がある。その結果、革新的なモノができれば、御の字である。

その改良のプロセスで、より設計し易く、そしてより作り易くなるよう、原理、原則に立ち返って考えをめぐらし、出来るだけ人手を掛けずに、高品質のモノ造りが可能になるよう工夫することを常に要求された。

モノ造りの達人ならではの、これがプロの設計思想ではないかと思う。

海外グラフィティ

イパネマの娘

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智

ふとした事がきっかけで、“ボサノバ”を思い起こした。かつて、テレビ朝日ニュースステーションで「海を渡った隠れクリシタン」というタイトルの特集で、日系人のブラジル移民を取り上げたことがあった。ブラジルの中で日系人が多く集まっているサンパウロ州をぶっつづけで3週間ほどロケしたが、当時、たぶん今も変わらないと思うが、ブラジル全体のGDPの7割はサンパウロ州が担っていた。勤勉なサンパウロ人（パウリスタと呼ばれる）と人生を楽しむ術（すべ）を知っているリオ（リオデジャネイロ）人（キャリオカと言う）で相当気質が違うという。



例の特集を放映するにあたり、一体どんなBGMを流すかが、ディレクター、音声担当、レポーターの自分との間で大議論になった。「イパネマの娘」を強く主張したのが自分だったが、楽曲にこだわる音声担当は「サンパウロの特集にリオ生まれのボサノバ曲“イパネマの娘”はふさわしくない」というものだった。「日本人が最も親しんでいるブラジル音楽はイパネマの娘なのだから、それでいいではないか」と強硬に押した。前にも述べたが、文化を全く異にするリオとサンパウロでは違うというのも確かに一理ある。

“イパネマの娘”の伝説は、世間によく知られている。作曲家ジョビンと、作詞家モライスは、リオのイパネマ海岸近くにあったバー「ベロイーズ」にたむろすることが多かった。そこで、よく母親の煙草を買いに来たエロイーズという美少女に触発されて即席にこの曲を作ったとされている。

”イパネマの娘“が世界的に知れ渡ったのは、1964年に女性歌手アストラッド・ジルベルトによって英語で歌われたのが初めて、これを機に、ボサノバそのものが世界的ブームになり、この曲がスタンダードナンバーとなった。

冒頭の「ふとしたきっかけ」とは、たまたま、垣間見たお客様の公開プロフィール中の趣味の欄で、好きな音楽として「ボサノバ」を挙げていたことによる。サンバでなく、ボサノバとしたところがいかにもクールだ。

「グルムさんのサポート 国際協力・視覚障害者支援活動」

NPO 法人 SV 経験を生かす会
理事 松田信治 理事 山内茂夫

(本稿は、NPO SV 経験を生かす会 会報 2016 年 4 月号 に掲載された記事を、了解をいただき、転載するものです。又 本活動の講演は 当会主催の第 23 回海外情報談話会 (2016 年 6 月 14 日) において、松田信治・山内茂夫両氏によりなされました。28 名の参加があり、多くの感動をいただきました。事務局)

I. 人との繋がり広がる支援の輪

松田信治

<グルムさんとの出会い>

「私は幸せな人です！」今回の「のど自慢 THE ワールド」のエンディングで司会者からの優勝の感想を聞かれた時、グルムさんは、こう答えました。

5 年前にキルギスでのボランティア活動を始めた 3 か月目のボランティア週間の最終日、グルムさんと出会いました。「日本の歌を歌いたいの、カラオケと本人が歌っているものを頂けませんか？」と言われてパソコンの中にたまたま有った「地上の星」をプレゼントしたのがきっかけでした。そして 2 週間後「聴いてくれますか？」と言われて彼女のアパートで点字の歌詞を指で触りながら歌う彼女の澄んだ声と正確な日本語に私は度胆を抜かれました。

それから私は多くの方にその歌声を聴いてもらおうとグルムさんの歌手活動を支援し始めました。「日本キルギス外交 20 周年記念式典」で大勢の参加者の前で歌ったのをきっかけに、少しずつ「全盲のグルムさん」がキルギスのメディアに出るようになりました。



キルギスでは障害者は「かわいそうな人、何もできない人」と思われていて「松田さん、そう思われることが一番悔しい。ただ見えないだけで、何でもできるのに」というグルムさんの親友のグルナスさん(弱視)の吐き捨てるように言った言葉が今でも忘れられません。グルムさんの頑張る姿を皆に見せることが、そのような間違った障害者観を少しでも変えることになると、私はグルムさんに日本語の歌を支援し続けました。帰国する時点では 5 曲ほど歌えるようになっていました。

グルムさんは「日本で日本の歌を歌いたい！」が夢でした。帰国してからこの夢実現に向けて、まず行ったことは、グルムさんの歌う動画をユーチューブに複数、アップしました。そして多くの人に彼女の歌声を聴いて貰いました。

次に考えたのが、今回出場した「のど自慢 THE ワールド」でした。番組にアップした動画を提出して申し込んだのですが、結果は「落選」でした。しかし、いつも頭の片隅に「グルムさんの夢実現をしたい」がありました。

それが実現したのが昨年度、12月27日に開催した「日本とキルギスを繋ぐ友好チャリティコンサート」です。クラウドファンディングを利用して127万円集め、320人ほどの参加者のもと、グルムさんは精一杯歌いました。多くの方から「また聴きたい、コンサート開いてください」とのメッセージを頂きました。

<「のど自慢 THE ワールド」本番まで>

チャリティーコンサートも無事終わり、録画したビデオを手にした時、ふと思い出したのが、かつて落選した「のど自慢 THE ワールド」。再チャレンジしたら今度は通りました。

3月4日、グルムさんと同行するアイスルーさんが成田空港に到着。キルギス大使館のリラ参事官も出迎えました。今回は外務省、在日キルギス大使館が全面的に応援してくれました。私は、ヘルパーの仕事を1週間、全てキャンセルしグルムさんに付き添いました。



彼らは日テレ側で用意されたホテルに宿泊、本番までの3日間、リハーサル、インタビューを行い、本番で歌う曲が本番前日に決定しました。グルムさんは本番が近づくにつれ、緊張でお腹を壊したり、声の調子が思うように歌えない状態になりました。そして本番当日、グルムさんがBグループで歌うことが分かりました。

Bグループは過去、出演したことがある人が2人も含む激戦グループです。私は「予選を通り、決戦で2曲目を歌う」これが出来れば良いと思い、予選で「元気を出して」を歌い審査員全員が満点の400点が出た時は、選手控室で思わずガッツポーズ、涙が出てしまいました。そして決勝では「涙そうそう」を堂々と歌い上げ、またもや審査員全員の400点を出し会場の審査員の点数を合わせて494点。断トツの優勝です！

あんなに緊張で追い詰められていたのに、最後の最後でやってくれました。「グルムさん頑張ったね！」番組終了後にグルムさんを囲んで、イタリアレストランで仲間と打ち上げを行い、祝福しました。

グルムさん達は翌日、帰国しましたが、その優勝の報告がキルギスに伝わり、キルギスの新聞にも多く載り、在キルギス日本大使館がマナス空港のVIPラウンジで花束で彼らを出迎えると言う粋な計らいをしてくれました。

<「のど自慢 THE ワールド」を振り返って>

このグルムさんの「優勝」は2つの大きな意味があると思っています。一つは、キルギスの視覚障害者の仲間に「希望と勇気」を与えたこと。そして「キルギス」という親日国を多くの人に知ってもらえたことです。今回の「優勝」はグルムさんのこれからの日本での歌手活躍の第一歩です！

「相手の喜びは自分の喜び、とことんやることによって真の信頼が生まれる」今回もそう感じています。

II. グルムさんの日本テレビ “のど自慢 The ワールド” への挑戦、そして頂点へ 山内茂夫

決勝戦でトリをとったグルムさんが「涙そうそう」を唄い終わると、それまで暫定1位のドイツ人歌手がステージに招き入れられ、グルムさんと並んで中央に立ち最終審査結果を待つ。ざわついていた会場が一瞬静寂となり緊張した空気が流れる。会場内の大きな特設スクリーンにグルムさんの得点 494 点が点灯した。



瞬間どよめきが起こり会場内が拍手と大歓声に包まれて行った。グルムさんが 8 か国 10 組の歌手の頂点に立った瞬間だった。全盲で日本語が分からないグルムさんはその瞬間表情が少し強張り緊張したように見えたが、後方に寄り添う通訳者から状況を告げられると、直ぐに満面の喜びの笑顔に変わっていった。「グルムーー。」「グルムさんやったよー、頑張ったよー。」

会場内の左翼席の一角に詰めかけた応援団のキルギス大使館のスタッフや、グルムさんのサポーター 20 人程の声援が次々と絶叫となってステージに飛んだ。特に視覚障害の仲間の応援がものすごかった。大歓声の中でこの声が聞こえたのか、グルムさんと通訳者がサポーター席に向かって大きく手を振る。ステージと応援席がその距離を超えて一体化して



いた。予選の時からこのグルムさんの優勝の予兆は何となく感じられた。予選のグルムさんの選曲は「元気をだして」。唄い出すと、澄んだ声と明瞭に伝わる歌詞が 1600 人の聴衆の心に沁み込んで行くように伝わり、会場内が水を打ったように静寂に変

日本テレビ番組の映像より

4 人の審査委員をはじめ 6 人のゲスト達、中居・西尾両司会者の目が潤んでいる。そして聴衆の多くが涙ぐむ姿が見られ、テリー審査委員長をして「グルムさんの唄には泣かされた。日本人の気持ちを思い出させてくれた。」と絶賛されて、400 点の満点を獲得。他

の出場者のアップテンポやビートの効いた曲調が多い中で、グルムさんの日本人の心の中に澄み渡るような歌唱力と選曲は大変際立っていた。

場所を変えて普段着に着かえたグルムさんを囲んで、キルギス大使館関係者とサポーター仲間約 20 人で早速祝勝会。グルムさんから「支援してくれた多くの人、特にマッチ（松田信治さん）にはとても感謝している事、日本のステージで唄えた喜びとそれが優勝につながったこと、ママ頑張って！！と家族の応援が大きな支えになった。」の喜びの気持ちが本人から披露された。早速キルギスの家族に優勝を報告したこと、グルム家では喜びの酒宴が始まっていることも紹介された。

緊張感から解き放たれた本当にうれしさが溢れるグルムさんの明るい表情が印象的でした。



松田会員が目指す“日本とキルギスの架け橋”が支援者の一人一人の力が束になって、また1つ大きく成長したことが実感できた一日でした。

冊子「電電およびNTT 民営化直後の海外技術協力活動」へのご評言

事務局

（標記冊子をご覧くださいました方々から、多くのご評言をいただきました。その一部を紹介させていただきます。紙面の都合上、いただきました意見の一部分を省略いたしました。事務局）

（アイウエ順）

有馬 彰様 （NTT コミュニケーションズ相談役）

よく整理されています。この様な記録は大切であり、資料室に保管したい。

相澤 紘史様 （元ブラジリア海外事務所長）

写真集、特に表紙の写真、パラガイの大統領と秋草総裁と一緒に写った写真は私も見ていない物でした。秋草さんに会うといつも、その時の話題が披露され、一度はパラガイ訪問の際に二世の学園長から送られた{?}カウボーイハット＝現地ではガウチョのハットですが、をかぶった写真も見せてもらったことがあり、大変懐かしく拝見しました。吉田實さんの寄稿、見逃していたようですが懐かしく拝読。貴重な蔵書として頂戴しました。

阿南 修平様 (元スリランカテレコム社長)

いろいろな方が、海外技術援助で頑張っておられていることに驚きました。確かに、このような草根の活動が、NTTのグローバル事業展開につながったと思います。

タイのTT&Tのプロジェクトでは、TOTはNTT専門家の活動や、キングモンクット工科大学への寄与等が、NTT選定において大きなウエイトを占めたものと、プロジェクトを推進したのものとして、確信しております。長年のTOTでの専門家派遣の方々の作成された資料がプロポーザル作成に大変参考になり、ストラテジックパートナーとして参画、NTTの東南アジアでの海外投資事業の端緒になりました。

また、本冊子における、石井様の言葉、「自分がどれほどのものであったか、一度しっかり棚卸をやってみて、残された人生に備える事も大事であろう」まさに至言だと思います。若輩ものの私がいうのも大変おこがましいのですが、私が、NTTコムを失礼させていただき、HCM(ホーチミン)の全く分野の異なる、タイルの製造業で勤務したのは、自分のNTTでの経験、培った経営能力を確認するためのものでした。部下もいなく、英語も通じない世界で大変苦労しましたが、いろいろ不明な点は勉強、分析して、ベトナム企業の業績向上の道を作りました。現在、さらに分野の異なった、お米作りをしています。お米を作るのではなく、商品を作る」気持ちで、HCMの異業種での経験を思い出し、老体に鞭を打ち、いろいろな失敗を繰り返しながら頑張っています。

荒木 光弥様 (国際開発ジャーナル社会長)

電気通信分野の専門家が、これほど多くの国際協力の分野でx x xのために挺身しているとは知りませんでした。開眼した思いです。それにしてもICT海外ボランティア会の持続力には敬服する所以です。

石井 孝様 (元NTTコムウェア社長)

本記録を切掛けに、電々及びNTTにおける海外技術に関わる活動全般を網羅した記録を残す事を是非考えて欲しい。

石野 文雄様 (元NTT国際部長)

完璧なものができましたね。第一線で活躍された方々の経験談には迫力があります。多くの方々に読んで頂けるといいですね。

吉田實さんの随筆を載せておられますが、彼はアフリカを回られた後、帰途ジュネーブに立ち寄られ、いろいろお話を聞かせて頂きました。その後私が国際部長で戻り、しばらくして高橋鉄夫夫妻が交通事故で重篤になられたという情報が飛び込んできました。逡信病院の先生の現地への派遣を決めましたが、吉田人事部長が、高橋さんには世話になったので、私が一緒に行きたいとの申し出を頂き、ケニアまで行って頂きました。高橋夫妻は結局亡くなりましたが、吉田さんは高橋夫妻のお子さんをNTT関連会社への就職のお世話なさいました。心深く印象に残っています。

海外協力で活躍された方々の熱意は世界各地の伝わっている筈ですから、生きてくることを期待しています。

海野 忍様 (NTTコムウェア社長)

グローバルビジネスが伸びているこの時期に、その礎となった諸先輩方の御活動を記録として残しておくことは、たいへん重要な意味があり、意義深いものと存じます。小生もわずかばかり海外での勤務経験がありますが、この冊子に記述されているような協力活動にはほとんど縁がなく、改めてその重要性を認識させていただきました。

大内忠康様 (元 NTT 総務部担当部長)

長年に亘って果たしてきた国際貢献の役割の大きさと、併せて10数年前から派遣数が先細りしてきている現状も知りました。

今般の本冊子の発行は、あらためてこれからを考える(どうしていくべきか)良い機会にもなったと受留めております。

以下、率直な感想です。

これまで電電(NTT)が積み重ねてきた役割・実績の継続性、各国相互間の交流の基盤インフラである通信事業分野の重要性からしても、少人数の現状のまま推移してしまうのはどうかと思われる。

つまり発展途上国向けに通信インフラ整備、設備メンテのノウハウ等で総合力を発揮できるのはNTTグループであり、これまで長年に亘り担ってきた役割・実績を活かし継続して、今後とも海外技術協力に力を注いでいく立場にあるのではないかと思う。

近年ICT分野のみならずあらゆる産業でグローバル化が進む中で、海外から多くの産業や文化の分野で日本の良さ・品質の高さが評価され、各国間との産業、観光などでの交流も今後更に増加していくと見込まれている。

海外での技術協力活動は、人材の育成、人の交流等から始まり、そこから信頼関係、友好親善が育まれると言われる。貿易立国にとって大切な基盤づくりである。

NTTグループとして、これまでの海外との技術協力の実績・ノウハウを活かし、JICAの傘下のもと可能な範囲でより積極的な継続・推進の意思(方針)を示して取り組んでいくことは世の中からも理解されるのでは、と僭越ながら思えてならない。

大塚 法昭様 (NTT 西 国際室長)

大変貴重な資料であり、私が入社時の人事部長の吉田さんの寄稿があるなど、興味深いです。私ども現役世代も先輩諸氏の活動に負けないようグローバルにチャレンジしていく所存ですので、ご支援方よろしくお願いたします。

小野塚 久枝様 (博士・税理士・前東京家政学院大学大学院教授)

すばらしい活動業績をあらためて鳥瞰させていただきました。

私が黒川技師長・総務理事の秘書として電々に在籍しておりました時代は、海外協力の黎明期です。松本薫、大島、河原田、松本孝等の各氏が海外に出ておられました。黒川氏ご自身もクウエイト、アメリカのベル研等々へ出張しておられました。懐かしさとともに「百里の道も一歩から」、まさにそう実感いたしました。貴会のますますのご活躍を念じ、皆様のご努力に深く敬意を表します。

貝淵 俊二様 (元 NTT 関西総支社長、元協和エクシオ社長)

この様な資料をまとめ、後世に残すことは貴重であり、極めて大切なことでもあります。

菊池 洋様 (NTT 持株、グローバル推進室部長)

貴重な記録。NTT 東西会社国際室にも送って欲しい。持株にも資料室があるのでそちらに保管させていただきました。また、社内の会合で紹介させていただいたところ、早速欲しいとの申し出がありました。

桑原 守二様 (元 NTT 副社長)

(本冊子を)纏められ刊行されましたこと、まことに意義深く、後世の方々の良い範例になるものと喜んでおります。おめでとうございます。

私は入社後5年目くらいからコロポ計画の研修生に対してマイクロ波の講義を仰せつかって以来、NTTの海外活動には比較的関心をもって眺めていた方だとおもっておりましたが、この度の冊子を拝見して、知らないことばかりであったと思い知らされました。秋草総裁がパラグアイ国から勲章を授与されたときの松本芳郎さんの記事などは、松本氏がブラジリア海外事務所長を務めて居られたことを含めて、全く存知あげなかったことでした。

寄稿文には大変多くの方々が寄稿され、興味深く拝見いたしました。私の同期の吉田實さんは人事部長をされておられましたが、その頃に海外で働く方々の状況把握と激励に行ってくださったのですね。本当に立派な方だと尊敬しております。

小林 光佳様 (NTT 常務取締役)

「海外技術協力」のご発行、誠におめでとうございます。貴会のますますのご発展を祈念いたします。

佐藤 征紀様 (BHN 理事長)

NTT 民営化後、分社化されるなどで、関係資料も分散され、これだけのものをまとめられるのは、さぞ大変でしたでしょうと推察しております。

当会 BHN の途上国支援活動は、NTT の諸先輩がこれまで長年ご尽力されて来られた技術協力活動の流れをくむものであり、現役時代国際協力活動に従事する機会のなかった小生にとっては、当時を知りうる貴重な生きた記録です。

小路 克雄様 (JICA 青年海外協力隊事務局)

貴重な記録です。NTT はかつてこれほどまでの専門家や協力隊を送っていたことは驚きです。一大企業文化でしたですね。

戸田 秀明様 (元 NTT 国際部長)

NTT の輝かしい海外活動を集大成した力作です。関係各位の熱意が実って出来上がった貴重な資料で、特に実務に従事した皆様の寄稿は「今だから」こそ集められたものといえるでしょう。皆様に大いなる敬意を表す次第です。

中西 寛様 (岡野電線取締役)

海外ビジネスにおいて重要なのは、相手との心の触れ合いであり信頼関係だと常々感じています。その意味からも、海外活動経験者の方々や青年海外協力隊経験者の方々といった貴重な人脈、経験をお持ちの方々の活躍の場をもっともっと広げるべきと思っています。本書は電電公社時代からの海外活動をまとめられたすばらしい資料と拝見しております。

福富礼治郎様 (元電電公社総務理事)

私は海外活動を担ったことはなかったのですが、読んで担った皆様のご苦勞が大層よく伝わって参ります。多くの方々に皆様のご苦勞を知って戴けるものと存じます。大変良い冊子だと思います。

松田 成就様 (元 JICA 専門家・タイ)

興味深く拝読させていただきました。自らも専門家として関わったことなので、読んでいると、どうしても感情移入してしまいます。私どもの年代では、海外勤務はやはり特殊であり、それだけに自ら経験し感得した様々なことをほかの人たちに伝えたいという気持ちがとても強くあります。

以前関西バンコク会を立ち上げ、専門家、TT&T など、タイに関係した NTT のメンバーと語り合っていて、誰もが自らの経験を語りたい、役に立ってほしいという気持ちでいっぱいであり、そうした経験を何らかの形で活かしてほしい、との気持ちを共有しました。そこで知り合いに、こうした人材を何とか活用してほしいと申し上げ、意見交換も致しました。

尽力されているこのような取り組みを通じて、多くの人がこうした活動に目を向けていくことを期待するものです。この取り組みが人と人との懸け橋となり、双方に有益な取り組みが生まれることを期待したいと思います。

宮津純一郎様 (元 NTT 社長)

「海外技術協力活動」をお送り頂き有難うございました。感心しました。

宮村 智様 (元駐ケニア特命全権大使)

取り敢えず、巻頭言を拝見したところ、有馬さん・奥野さん共に海外技術協力活動が近年における NTT グループのグローバル事業の拡大に大きな貢献をしていることを高く評価しており、とても嬉しく感じるとともに、意を強くした次第です。

寄稿集の目次を見ると石井顧問や加藤さんの寄稿のほか、ケニアやかつて小生が訪れたことがある様々な国に対する技術協力について記した寄稿もあるようですので、これから時間を見て、楽しみながら拝読させていただこうと思っております。

このような冊子を作ることは、いわば「歴史に残す」ことであり、極めて意義深いことであると思料します。NTT が民営化されたから既に 30 年強。気が早いかもしれませんが、近い将来、民営化直後のみならず、最近までの海外技術協力活動を描いた冊子を作られるように期待しております。(2016 年 1 月 16 日記)

村上 治様 (元 NTT 副社長)

懐かしい名前が沢山出て来て楽しく追えるように思います。純ドメなどと言っておりましたが、全く無縁で居れたわけではなく、英会話など勉強したことも無いのに、東南アジアからの留学生に講義をさせられたり、インドのエンジニアのインド式発音に面食らったり、オーストラリアでファクスマリ NET の技術協力で、現地での開通式典に引っ張りだされて、英語でお祝いのスピーチをさせられ、冷や汗をかけた事等思い出されております。

FaceBook 石井 孝様 (2016 年 2 月 7 日)

内輪の話で恐縮であるが、この度、ICT 海外ボランティア会が NTT コムの有馬彰取締役（前社長）の絶大なるご支援の下、「電電公社および NTT 民営化直後の海外技術協力活動」という冊子を纏めた。電電公社（後の NTT）は 1955 年頃から 2000 年初頭の半世紀にかけ、アジア・大洋州、中南米、および中近東・アフリカのおよそ四十数か国の開発途上国に対し、研修生の受け入れ、専門家の長期派遣や、青年海外協力隊参加等の形で、情報通信インフラに関する地道な技術協力活動を行ってきた。これに従事した職員の数合計すると延べ千名をゆうに越して居る。こうした活動の費用対効果を計ることは中々難しいが、社業の推進（国際化）に貢献した事は勿論であるが、我が国の国益（貿易の推進等）に少なからず資したものと思っている。所が、こう云った活動が世の中には殆んど知られていないだけで無く、社内ですら十分エクспリシットな容になって居らず、どちらかといえば日の当たらない存在になって居た。我が国のような資源に乏しく、且つ少子高齢化の進む状況においては、経済発展の基盤を、国内のマーケットに多くの期待はかけられない。その結果、貿易立国（特に輸出）にならざるを得ない。こうした状況を盤石にする為には、他国の経済を発展させる、そこに日本の生きる道があるものと信ずるが、最近の状況を観ると、目先の利益のみにとらわれ、先々を展望した地道な協力活動が以前に比べると疎かになっているのではなからうか。日本の現況はそれどころではないと言う人も居るであろう。野村監督語録によれば、打者を抑えるということは、一試合の全打席を展望して、チャンスに当該打者が登場した時に仕留めればよいわけで、チャンス以外の打席では餌を蒔いておく、それが出来るキャッチャーがプロだと言っている。喩えとしてはあまり良くないかも知れないが、ビジネスも同じである。（この書き込みに対し、40 名から「いいね」の反響がありました…事務局）

冊子に意見を頂いたその以外の方々 （ご氏名のみ、アイウエオ順 敬称略）

伊東 悠治	磯崎 澄	岩噌 弘三	内田 孝則	梅里 伸正	遠藤 和彦
加藤真由美	笠原 正昭	加納 貞彦	加原 学	木村 英俊	栗林 勝
栗山 正雄	斎尾 恭子	佐藤 征紀	佐藤 桃子	島田 博文	下野 譲
高島 一純	立川 啓二	広内 俊夫	松舘 文子	杉浦 右蔵	高橋 正明
田村 俊毅	寺内 賢一	畑山 光明	本多 宏道	真崎 秀介	松本 慎二
松本 芳郎	松本 文雄	森 勇	山下 満男	米岡 泰	

第 24 回海外情報懇談会開催のお知らせ

主催 ICT 海外ボランティア会
協賛 情報通信国際交流会

第 24 回海外情報懇談会は下記により開催されます。参加下さいますようご案内いたします。

日 時： 平成 28 年 7 月 22 日（金）午後 3 時～5 時
場 所： **JTEC（五反田）会議室**
題 目： 「エネット創設の前後」
講 師： 元 NTT ファシリティーズ社長 森 勇氏
概 要：

2000年1月、NTTグループとして電力小売り事業に参入するかどうかの検討プロジェクトをスタートするので、リーダーとして引っ張って行って欲しいとのご下命を受けました。

3月にNTT、東京ガス、大阪ガスの3社によるプロジェクトを立ち上げ、若き精鋭達と議論を重ねていくうちに、是非ともチャレンジしてみようという気になってきました。

紆余曲折はありましたが、NTT-F、東京ガス、大阪ガスの三社で新規会社を起こして、電力小売り事業に参入する方向が決まりました。

6月には新会社名を「㈱エネット」に決定し、株主構成はNTT-F:40%、東京ガス:30%、大阪ガス:30%、非常勤役員はNTT-F社長、東京ガス副社長、大阪ガス副社長、資本金は5億円弱でスタートすることとしました。

7月6日に記者会見を開き、NTTの宮津社長はじめ、両ガス会社の社長方や幹部にお集まり頂き、前夜祭(キックオフ)を挙行了しました。いやが上にも、社員のモチベーションは最高潮に達し、燃え上がりました。

翌、7月7日(七夕の日)を会社設立日として、前にレールの無い道を歩き始めたのです。

11月には増資をして頂き、資本金63億円の大会社として、事業開始を決定しました。

翌2001年1月に、PPS(大規模電気小売り事業者)届出、2月にはHP立ち上げ、事務所の移転(芝公園)、3月にはエネットシステム(30分同時同量方式)立上げを矢継ぎ早に実行しました。

いよいよ、4月1日から営業開始をし、荒れ狂う大海原に羅針盤も持たずに、小舟で漕ぎ出したのです。

その後は、文字通り、高くて厳しい参入障壁や、既存電力会社の巨大な圧力に押しつぶされそうになりながらも、何とか這い上がって行くことが出来たのですが、その生き様を、赤裸々にお話したいと思えます。そんなことがあったのかと、何かを感じ取って頂ければありがたいです。

参加：**入場無料** お気軽にどうぞ！(会員制ではありません)

参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 info@ictov.jp までご一報下さい

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集担当 加藤 隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp)、または

村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

- ・ 「電電およびNTT 民営化直後の海外技術協力活動」について、当会で編集した冊子へ多くの方の反響をいただきました。またこの活動に関連して当会主催の海外情報談話会でパネル討論を行いました。本号ではこのパネル討論に参加された吉田 眞様から巻頭言をいただきました。また冊子をご覧になった方々から多くの評言をいただき、これも掲載させていただきました。いずれも示唆に富んだもので、当会の今後の活動に役立てたいと思っています。
- ・ SV 経験を活かす会の松田・山内両理事から「国際協力・視覚障害者支援活動」として、キルギスの全盲歌手グルムさんが、日本語の歌で日本の TV のど自慢大会で優勝するまでの献身的な支援を綴られたもので、当会開催の同演題での談話会の講話と同様に感動的で、ここに海外協力の真髄を見る思いです。 (以上 加藤)
- ・ 石井さんの「真藤語録」 今回の話題は「機器・システムの開発は」現在改造改善している物を如何に改良、改善から始めることでした。突然優れたものが生まれるわけではないと。青色LEDの開発も、多くの時間と多くの関係者の努力で出来上がったこと思い出されます。
- ・ 田上さんの海外グラフィティ「イパネマの娘」寄稿していただきました。リオ五輪が近いので良い機会と思います。私は偶然ニュースステーションで視聴する事ができました。当時はBGMに係る議論があったとは当時は知りませんでした。田上さんには次号にも寄稿して頂く予定です。ご期待ください。

(以上 村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編集長：ICT 海外ボランティア会 広報部長 村上勝臣

報道部長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 山崎義行

発行：ICT 海外ボランティア会 (メール：info@ictov.jp)